

生涯教育研修活動報告書

遺伝子染色体・病理検査研究班

- 1 実施日時：2023年2月10日 18時00分～19時00分
- 2 会場：Web開催 教科・点数：専門教科－20点
- 3 主題：がんゲノム医療における臨床検査技師の役割 ～今後の展望～
- 4 講師：鎌倉 靖夫（埼玉医科大学国際医療センター）
柿島 裕樹（国立がん研究センター中央病院）
- 5 協賛：なし
- 6 参加人数：会員158名 賛助会員0名 非会員0名
- 7 出席した研究班班員：（遺伝子染色体検査）小内玲子、松岡優、園山政行、石橋佳朋、
折原悠太、相良真理子
（病理検査）関口久男、森田繁、高橋俊介、小島朋子、細沼佑介、
今村尚貴、遠山人成、松本祐弥、三鍋慎也

8 研修内容の概要・感想など

今回は遺伝子染色体検査、病理検査の合同研修会として、「がんゲノム医療における臨床検査技師の役割」をテーマに開催した。

鎌倉氏は「がん遺伝子パネル検査の現状と臨床検査技師の関わり方」と題し、自施設での実績を基に解説した。がん遺伝子パネル検査は年々増加傾向にあるとのことで、現在の医療において重要な位置を占めることが窺われた。その中で臨床検査技師は、検査手順の説明、患者用資料の配布、講習会開催案内、C-CATへの登録、エキスパートパネルの運営等、一連の検査の中で多くの部分に携わり、多職種を繋ぐ架け橋のような役割を果たしていることがわかった。また、がんゲノム医療コーディネーターと連携し、検査全体を把握・コントロールしていくことが大切であると感じた。

柿島氏は「がんゲノム医療における検査の留意点について」と題し、検体の品質管理の重要性を解説した。がん遺伝子パネル検査の検体は、基本的に手術等により摘出されたがん組織であるので、病理検査での固定液、採取から固定までの時間、固定時間、パラフィンブロックの保管状況、保管期間等が、検査に影響を与えるファクターとなる。これらを管理していくことが臨床検査技師に求められているとわかった。また、DNAだけではな

く、RNA の抽出を考慮した病理検体の取り扱いが、今後求められるであろうとのことであった。

がんゲノム医療は身近なものになってきており、今後も確実に増えていくと考えられる。我々臨床検査技師は、検査のエキスパートとしてがん遺伝子パネル検査の中心的役割を担っていかなければならないと感じた。今回の研修会が、ゲノム医療において臨床検査技師として自分は何ができるかを考えるきっかけになってもらえれば幸いである。

提出日 ; 2023 年 2 月 13 日

文責 : 三鍋慎也